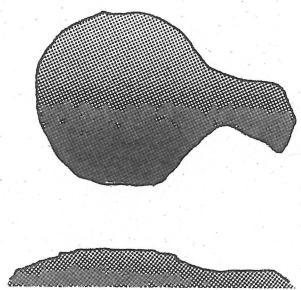


雲仙市文化財調査報告書 第7集

moriyamaotsuka  
**守山大塚古墳**

—市道吾妻平木場線改良工事に伴う発掘調査報告—



2010

長崎県雲仙市教育委員会



## 発行にあたって

このたび平成21年度に実施しました、市道吾妻平木場線改良工事に伴う守山大塚古墳発掘調査の報告書を発行することになりました。当市は平成17年10月11日（10月11日）に7町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）が合併して誕生し、「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現を目指しています。

守山大塚古墳は、島原半島の北側、雲仙市吾妻町守山条里跡の中に位置します。条里跡の両脇には、雲仙山麓より続く舌状丘陵が延び、古墳のすぐそばを田内川が流れます。普賢岳側から有明海に向かって緩やかに傾斜する平坦な扇状地の中に、比高差7mを測る守山大塚古墳の墳丘がそびえます。墳丘の上からの眺望は、南側には雲仙普賢岳がそびえ、北側眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

守山大塚古墳は島原市の郷土史家、故宮崎康平氏が発見した前方後円墳です。現在は墳丘全面が墓地となっており、墓石が立ち並ぶ姿はおおよそ古墳とは思えません。宮崎康平氏の著書「まぼろしの邪馬台国」の中でも紹介された古墳として当時から注目されていました。これまで調査歴はほとんどなく、近隣で散見される遺物や墳丘の形態から、「初期の前方後円墳であろう」と推測されておりました。大きさも全長が70mと県内でも最大級のもので、弥生時代から古墳時代へ移り変わる有明海沿岸地域の歴史を語る上で、鍵となる古墳としても認識されていました。今回の調査の結果、墳丘にはしっかりと葺石が施されており、墳丘の規模も一回り大きくなることが判明しました。崩落した葺石の下からは、墳丘に供えられていたであろう壺や甕の土器片が出土し、4世紀前半にはすでに古墳が存在することも分かりました。また、周囲の周溝は幅10mを超えるものと予想され、築造当時の姿を垣間見ることができ、当時の人々の古墳に対する思いが伝わるようです。

雲仙市では地域発展を目指して、各種の公共事業を行い、これまで残してきた地域の原風景が大きく変貌しようとしております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。本市では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めて参りました。そして調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本市にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様のご指導に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成22年2月28日

雲仙市教育委員会  
教育長 塩田貞祐

## 例

1. 本報告は平成20年度及び平成21年度に実施した市道吾妻平木場線改良工事事業に伴う長崎県雲仙市吾妻町に所在する守山大塚古墳の発掘調査の報告である。

2. 調査は雲仙市教育委員会が担当し、下記の期間実施した。

2008年10月20日～11月17日

守山条里跡試掘調査

2009年5月19日～6月25日

守山大塚古墳発掘調査

3. 調査体制は次のとおりである。

雲仙市教育委員会（平成20年度）

教 育 長 鈴山 勝利（～12/1）

教 育 長 塩田 貞祐（3/1～）

教 育 次 長 塩田 貞祐（～2/28）

生涯学習課長 川鍋 嘉則

課 長 補 佐 金子 悅治

文化財班班長 田中 卓郎

文化財班係長 江崎 亮太

主 植 査 辻田 直人

主 事 徳永 真幸

文化財調査員 山下 美郷・小野 綾夏・

大野 瑞恵

文化財整理員 早稲田一美・柳原亜矢子・

林田 崇

調 査 担 当 辻田・小野

現体制（平成21年度）

教 育 長 塩田 貞祐

教 育 次 長 山野 義一

生涯学習課長 川鍋 嘉則

課 長 補 佐 金子 悅治

文化財班班長 田中 卓郎

文化財班参事補 江崎 亮太

係 長 辻田 直人

主 事 徳永 真幸

文化財調査員 小野 綾夏・大野 瑞恵・

村子 晴奈

文化財整理員 早稲田一美・柳原亜矢子・

小笠 智枝

調 査 担 当 辻田・小野

## 言

4. 遺物の接合は柳原、遺物の実測は小野が、トレイスは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は辻田・小野・早稲田が行い、写真は現地調査を辻田・小野が撮影した。掲載遺物写真は小野・柳原が行い、写真編集は小野が行った。

5. 現地での遺構の実測及び、墳丘断面図の作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。

6. 空中写真撮影業務は株式会社九州文化財研究所に委託した。

7. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園 歴史民俗資料館で保管している。

8. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

9. 現地調査および本書の刊行にあたり多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。小田富士雄（福岡大学）、柳沢一男（宮崎大学）、蒲原宏行（佐賀県）、久住猛雄（福岡市教育委員会）、重藤輝行（佐賀大学）、本田秀樹（長崎県立北高等学校）、竹中哲朗（諫早市教育委員会）、西村 修、長崎県学芸文化課、九州前方後円墳研究会、長崎県考古学会、市立鶴田小学校、有限会社 中村工業、株馬場鉄鋼、雲仙市道路河川課（順不同）

10. 本書の執筆・編集は辻田・小野による。

# 目 次

巻頭図版（中表紙）

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯（小野） ..... 1 p

　第1節 発掘調査にいたる経緯

　第2節 発掘調査の方法及び経過

　第3節 遺跡の地理的・地形的環境

　第4節 歴史的環境

　第5節 調査歴

第2章 基本土層（辻田） ..... 4 p

　第1節 各調査地点の対比

第3章 古墳の調査（辻田・小野） ..... 6 p

　第1節 平成20年度試掘調査（小野）

　第2節 平成21年度本調査（小野）

　第3節 検出遺構の配置（辻田）

　第4節 墳丘形状（辻田）

　第5節 遺物について（小野）

第4章 まとめ（小野） ..... 16 p

　第1節 概要

　第2節 まとめ

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)	
第2図 調査区配置図 (1/1,000) .....	1
第3図 調査区土層図 (1/125) (配置図1/1,000) .....	5
第4図 検出遺構配置図 (1/100) .....	9
第5図 遺物出土地点の分布 (1/1,000) .....	11
第6図 墳丘断面図 (1/1,000) .....	13
第7図 出土遺物他 (1/3) .....	15

## 表 目 次

第1表 守山大塚古墳出土土器観察表.....	19
------------------------	----

# 図版目次

中表紙図版（カラー） 守山大塚古墳と丸塚古墳

本文中図版（モノクロ）

- |                                     |                             |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| 6頁 TP-1 葦石検出状況（南側より）                | TP-2 完掘状況（南側より）             |
| 7頁 1区葦石検出状況（北側より）                   | 1区遺物検出状況（南側より）（15頁第7図1・2・3） |
| 2区礫集中地点検出状況（南側より）                   | 2区完掘状況（南側より）                |
| 8頁 1区・試掘坑1葦石検出状況（南側より）              | 試掘坑1葦石検出状況（北側より）            |
| 試掘坑2葦石検出状況（南側より）                    | 試掘坑2遺物（二重口縁壺）検出状況（西側より）     |
| 11頁 平成20年度 説明会風景                    | 平成21年度 説明会風景①               |
| 平成21年度 説明会風景②                       | 守山大塚古墳後円部と秋の空               |
| 13頁 1983 吾妻町教育委員会編「吾妻町史」巻頭カラー写真より転用 |                             |

図版1（モノクロ）

遺跡上空写真（昭和38年国土地理院）

図版2（モノクロ）

古墳上空写真

上段 第二次大戦直後米軍撮影写真

下段 昭和38年国土地理院

図版3（カラー）

古墳上空から雲仙普賢岳を望む（平成21年6月  
19日）

図版4（カラー）

古墳上空写真

上段 調査区配置状況

下段 葦石検出状況

図版5（カラー）

古墳上空写真（奥は田内川）

図版6（カラー）

古墳近景（右側が前方部）

TP-1 墨書き器検出状況（15頁第7図8）

1区葦石検出作業風景

1区遺物検出作業風景（9頁第4図1・2・3）

1区葦石除去後の状況（北側より）

1区取上げた葦石

2区礫集中地点検出状況（南側より）（9頁第4図）

2区高壊検出状況（北側より）（15頁第7図5）

図版7（カラー）

試掘坑1北壁土層（9頁第4図）

試掘坑1石列北側土層（9頁第4図）

試掘坑1石列南側土層（9頁第4図a-a'）

試掘坑1取上げた葦石

試掘坑2裏込め検出状況（北側より）（9頁第4図）

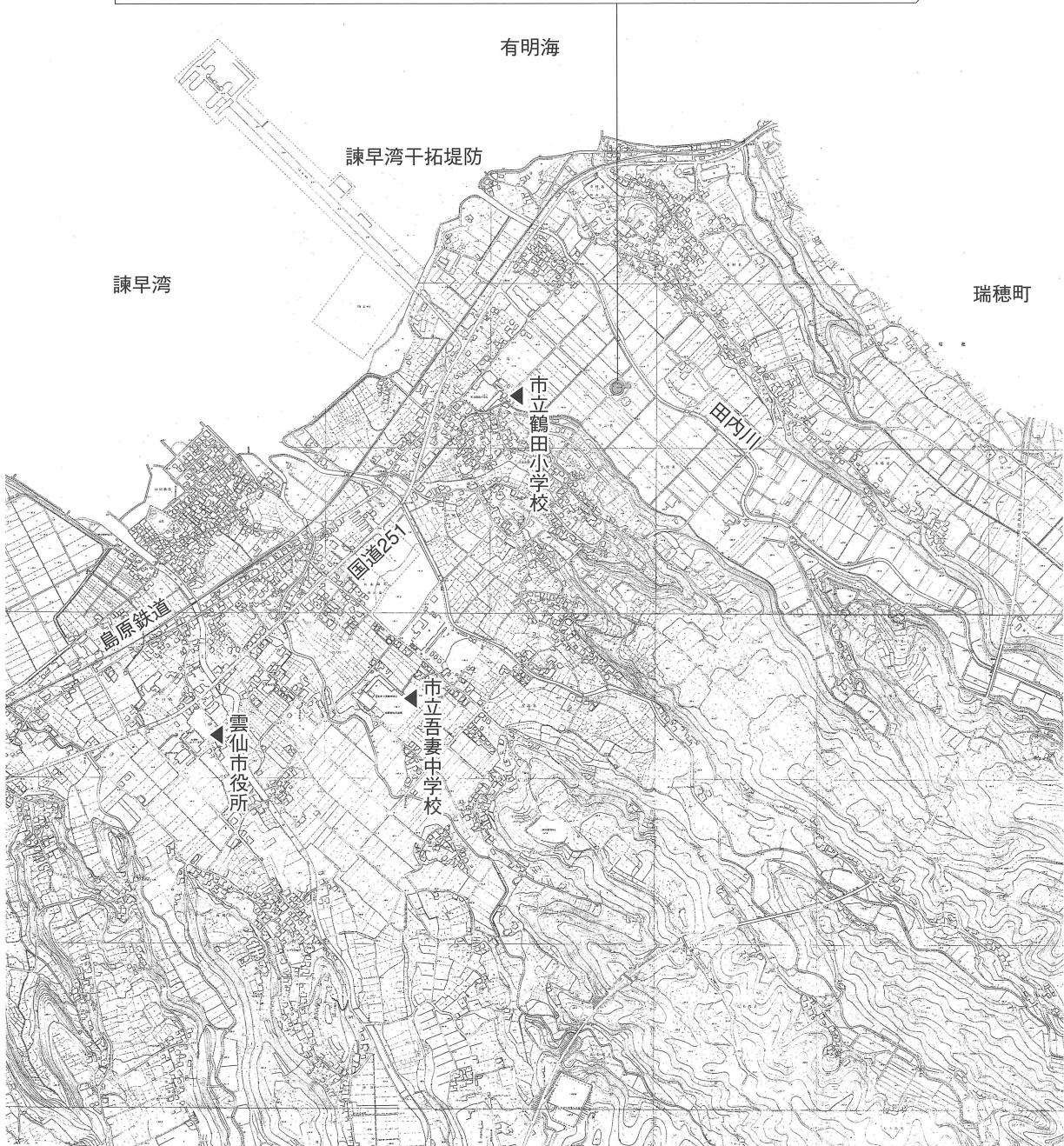
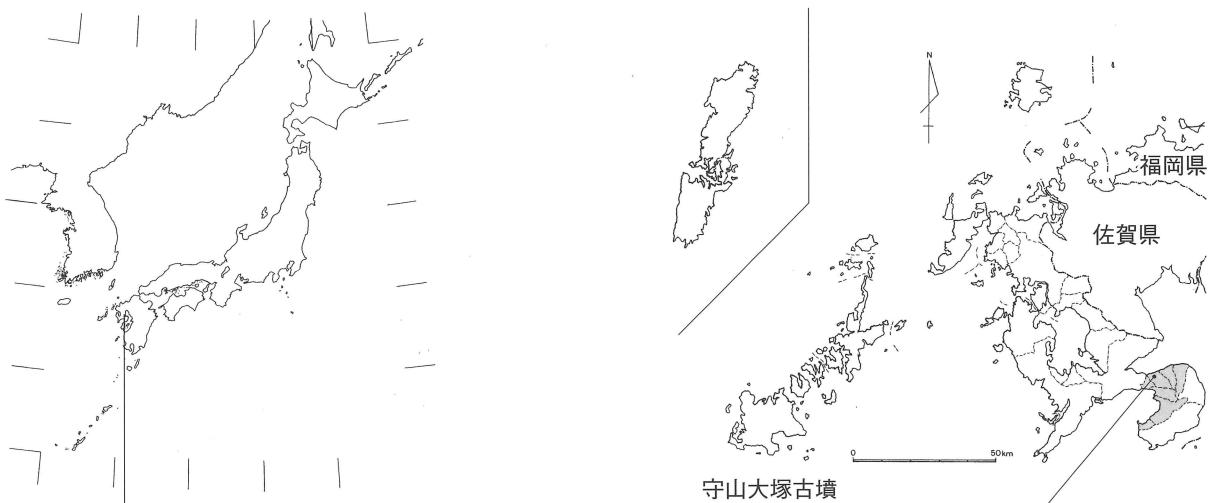
試掘坑2葦石検出状況（南側より）（9頁第4図）

試掘坑2二重口縁壺出土状況（15頁第7図7）

墳丘基礎部分の位置

図版8（カラー）

出土遺物他



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯（第1図、第2図）

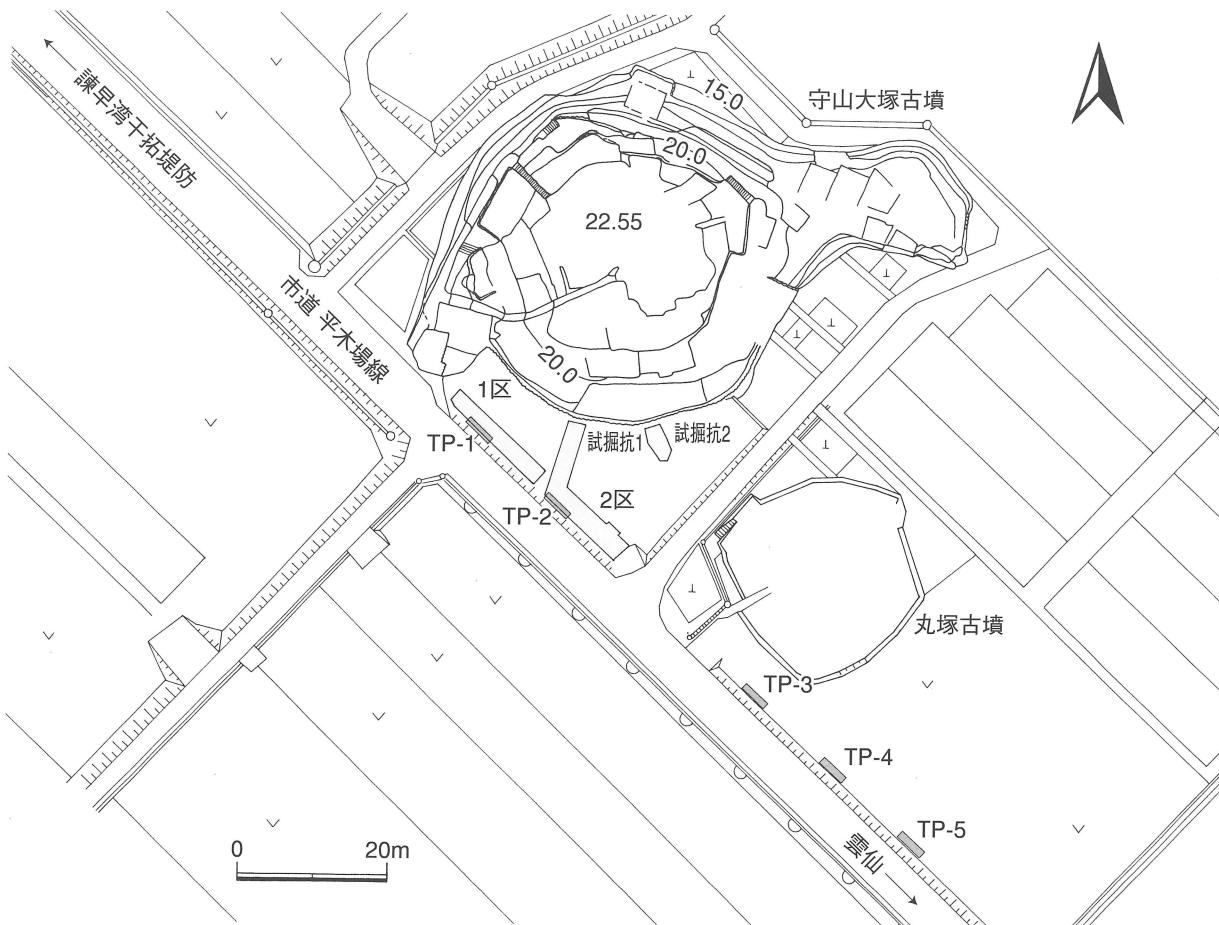
平成20年度より実施される市道吾妻平木場線改良工事が、守山大塚古墳及び丸塚古墳を含む守山条里跡にかかるため、市長部局と協議を行い、試掘調査の範囲を決定した。試掘調査は平成20年10月20日から11月17日に、守山大塚古墳西側の畠に2ヶ所、丸塚古墳西側の畠に3ヶ所トレンチを設定し調査を行った。当地区は平成4年にすでに圃場整備事業が実施され遺跡が消滅している可能性も考えられたが、試掘調査を実施すると、かなり残存状況が良いことが判明した。調査の結果、守山大塚古墳側のTP-1で崩落した葺石と考えられる礫群が、TP-2からは周溝底と考えられる部分を検出するに至った。この試掘調査の結果を踏まえ、雲仙市道路河川課と協議を行い、道路建設により遺跡の消滅する部分については本格的な発掘調査を行うこととなった。

本調査は平成21年5月19日から6月25日の約1ヶ月間に渡り実施した。

今報告書では、平成20年度に行った試掘調査及び平成21年度に行った本調査について報告する。

## 第2節 発掘調査の方法及び経過（第2図）

調査は、市道吾妻平木場線道路拡幅予定地を対象に行った。表土及び旧耕作土については重機により掘削した。調査区内の遺構面検出・遺構掘り下げについては全て人力で行い、地形については平板実測で、遺構については手実測により1/20で平面図及び断面図を作成した。遺物は基本的に同一層及び各遺構一括で取り上げた。また、葺石下から出土した遺物についてはドットマップを作成してい



第2図 調査区配置図 (1/1,000)

る。道路拡張部分の調査区を北側（海側）から1区・2区、古墳に向かって斜めに入れたトレンチ（試掘分）を北側（海側）から試掘坑1・試掘坑2と設定した。

### 第3節 遺跡の地理的・地形的環境（第1図）

守山大塚古墳のある吾妻町は、島原半島の北西側、雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜する火山性山麓扇状地に位置する。千々石断層線上に東～西に一列に並ぶ吾妻岳（836m）、鉢巻山（660m）、山田原扇状地の扇頂（277m）を起点にし、北西方向に緩やかに傾いた火山の裾野に位置している。

吾妻の阿母崎は、島原半島で最も早く干拓が行われた場所で、170年前に島原藩が施主となり阿母崎から愛野町野井かけて、農民を一日米一升で雇い工事をしたのが始まりである。その後、1989年に始まった諫早湾干拓事業によって、吾妻町から諫早市高来町にかけて造られた潮受け堤防が1997年に完成し、現在では諫早湾の大部分が干拓となった。2007年には堤防干拓道路として開通し、佐賀県や諫早市と雲仙市との行き来が容易になり、多くの人に利用されている。しかし、有明海及び諫早湾では、自然環境の変化や漁業への影響などが未だに大きな問題として残り、解決するまでにまだ時間がかかりそうである。

町内の東側に田内川、西側に山田川、その2本の間に田川原川と土井川が流れしており、これらの河川のおかげで、肥沃な土砂を堆積して、豊かな穀倉地帯を形成する沖積平野を作り上げている。谷底平野と河川下流の沖積平野の土壤は、細粒灰色低地土壤で安山岩の風化物を母岩とする低地土壤である。

守山大塚古墳は吾妻町の東端、有明海に注ぐ田内川の河口から600mほど南東の標高15mほどの扇状地に位置している。

### 第4節 歴史的環境（第1図）

吾妻町内には、南方向の山側に縄文時代の遺跡が多く、北方向の海側には古墳が多く点在している。縄文時代の遺跡で特筆すべきは弘法原遺跡である。鉢巻山から派生した尾根の扇状部付近の緩傾斜地に位置している。昭和55年から5回の調査が行われており、時期は縄文時代早期～前期、集石や焼土集中部分などが検出されている。遺物は山形文などの押型文土器や石器が出土しており、その出土量が非常に多く、弘法原式土器の標式遺跡としてもよく知られている。

古墳時代では杉山古墳がある。時期は古墳時代後期で、発見された際には墳丘は破壊されており、石室が露出している状況であった。横穴式石室を持つ円墳であったと伝えられており、鉄製品や玉類、須恵器などの副葬品が出土している。この他にも吾妻町内には多くの古墳が点在している。

吾妻町の西側を流れている山田川と土井川の間には町内では最も広い面積を持つ山田条里跡が、守山大塚古墳の東側を流れている田内川と田川原川の間には守山条里跡が奈良時代の遺跡として残っている。山田条里跡は『肥前風土記』によると、「たかく こおり さと ところ こざと うまや とぶひ高来の郡、郷は九所、里は二十一、驛は四所、烽は五所なり。」とあり、和名抄には船越（諫早の旧名）、山田（吾妻町の旧名）、野鳥（島原市か千々石町）、新分（不明）に駅があったとされている。これらは当時、彼杵郡の南、島原半島に渡る北高来・南高来の両郡と諫早の地が含まれていた。そこに4つの駅がおかれ、その一つが山田（吾妻町）であると言われており、山田条里跡周辺ではないかと考えられている。今も昔も吾妻町は、島原半島において交通、経済、文化の中心であったことが分かる。守山条里跡は山田条里跡に次いで吾妻町内で2番目の面積を誇り、この条里跡範囲内に守山大塚古墳が位置している。平成20年度の試掘調査の際に、葺石の直上の層から、底面に墨で「井」の文字が書かれた墨書き土器が出土している。墨書き土器は奈良時代に郡衙などの公的施設で使われていたことが考えられており、この出土した墨書き土器から、

守山条里跡内には文字を使うような公的な建物が存在していたことが推測される。

守山大塚古墳は現在、墳丘上は墓地として使用されているため、多数の墓石が建てられている。建てられている墓石の中には、元禄や寛政などの江戸時代の年号があるものも見られるため、古くは江戸時代から墓地として活用されていたようである。五輪塔などの江戸時代以前のものは見られず、江戸時代前までは古墳としての認識があったのだろうか。

昭和30年代に入って、「まぼろしの邪馬台国」の著者である宮崎康平（一彰）氏により、初めて守山大塚古墳は前方後円墳であることが確認された。この際には、調査などは行われておらず、内部主体や時期などの特定には至っていない。

前述したように、墳丘上には墓石が密集して建てられており、古墳内部の調査は行われていないため時期や内部主体などほとんどのことが判明していない。このように詳しいことに関して特定に至っていなかったため、「古墳時代後期なのか中期までさかのぼれるのかは判然としない」と1983年刊行の吾妻町史には記載されている。

## 第5節 調査歴

守山大塚古墳及び丸塚古墳周辺は、これまでに数度の調査が行われている。しかし、守山大塚古墳に直接関係する調査は行われておらず、時期や詳しいことは判然としていなかった。今回、平成20年度の試掘調査により、古墳に関わる遺構を検出したため、次年度本調査に入った。

以下、時系列的にこれまでの調査を概観する。

**昭和27年** → 後円部から箱式石棺が一基出土したと言われているが、詳細については不明である。

**昭和41年・8月** → 島原史学会が丸塚古墳の中央部に1.5×5mのトレーナーを設定し、試掘調査を実施。深さ40~50cm地点で、弥生の高壙片と古墳初頭の高壙片が出土している。この調査時に出土した遺物は、残念ながら所在不明となっている。古墳に直接関連した遺構は検出されていない。

**昭和52年** → 島原工業高等学校郷土部が墳丘の測量を実施。この際の数値は全長83mを測り、後円部は直径が45m、高さが7m、前方部の高さは2.7mである。一方、丸塚古墳は直径約27m、高さ3mを測る。

**昭和63年～平成元年** → 県営圃場整備事業のための試掘調査を郷土史家の古田正隆氏が実施。その際、守山大塚古墳周辺なども調査を行っている。遺物等は少なからず出土しているようだが、古墳自体に関連するものは見つかっていない。

**平成2年** → 長崎県学芸文化課が測量調査を実施。現在言われている守山大塚古墳計測値はこの時のものである。古墳は現存で全長66mあり、後円部直径は45m、高さ7.2m、前方部幅は15m、高さ2.5mを測る。主軸方位はN86度Eである。この測量調査の際に、二重口縁壺の破片が表面採取されている。

**平成20年10月** → 雲仙市教育委員会が、守山大塚古墳西側の畠に2ヶ所、丸塚古墳西側の畠に3ヶ所のトレーナーを設定し試掘調査を実施。その結果、古墳に伴う遺構が検出できたため本調査に至る。

### 【参考文献】

吾妻町教育委員会 1973『吾妻町の文化財7 杉山古墳調査報告書－消失した古墳の図上復元の研究－』  
吾妻町 1983『吾妻町史』

小田富士雄編 1995『風土記の考古学5 肥前国風土記の卷』

独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』

長崎県教育委員会 1998『原始古代の長崎県－資料編－』

## 第2章 基本土層

### 第1節 各調査地点の対比（第3図、図版7）

土層は全体的にはほぼ同じであり、周溝の最も深い場所で9層を数える。次頁に調査区の壁面土層図を掲載している。各土層の詳細については次頁図中に記載している。

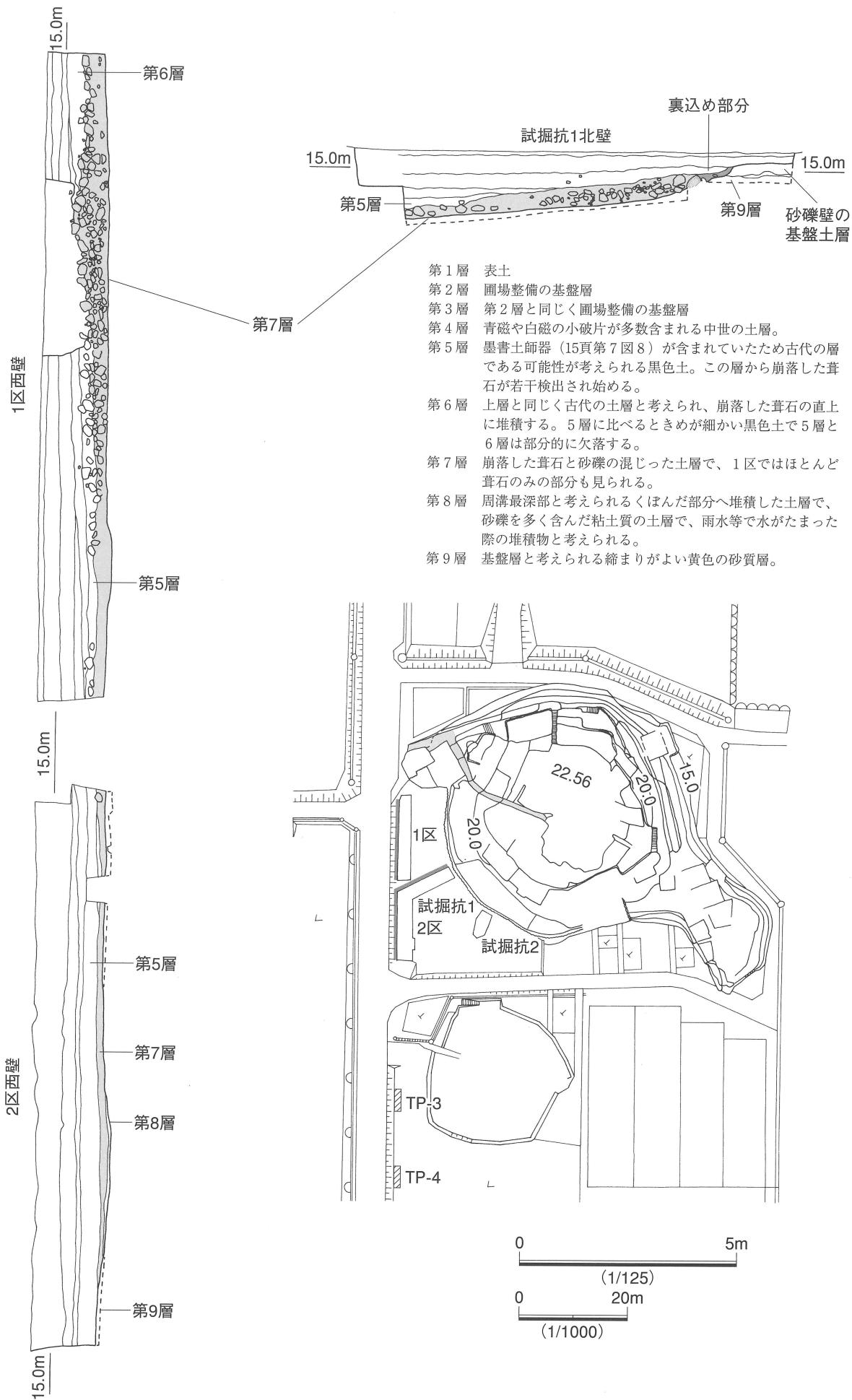
#### 一堆積状況についての若干の考察一

次頁第3図を見てのとおり、土層は後円部西側の若干離れた部分（1区・2区西壁）と、後円部に直交するような形（試掘坑1北壁）で観察することができた。1区・2区は今回の調査の結果、古墳周囲の周溝内部の土層を現しており、試掘坑1は墳丘裾部から周溝内へと延びる土層の堆積を表している。

まず1区・2区の土層堆積から観察する。最も墳丘に近い1区北側から2区に向けて、墳丘から遠くなるほど最下層のレベルが徐々に下がっている。試掘坑1の土層堆積でも分かるとおり、墳丘裾部分から周溝内に向かって緩やかに傾斜がつけられているためである。2区の南側土層図（2区調査平面図の拡張部分付近）に若干くほんだ部分が見られ、周溝の最深部とみられるが、周溝の墳丘に対する対岸については、今回の調査では判明しなかった。しかしながら、試掘調査のTP-3以南では現地表面から20cmほどで基盤と考えられる土層に達する。周溝最深部は地表面より2m程下であることを考えると、TP-3までの間に対岸部分が存在するものと考えられる。1区に見られる大量の崩落した葺石群は2区になるとほとんど姿を見せなくなる。これは墳丘から離れるため崩落した石が到達しないせいもあるが、墳丘の場所によって崩落度合いの違いが現れている。墳丘平面図を見ると20mのコンターラインが後円部西側で大きく内側へ湾曲している。守山大塚古墳の墳丘上へ通じる通路で、唯一階段以外の坂道で登頂可能なものが西側からの通路（薄い網かけ）であり、傾斜が緩やかとは言えないが、急角度で立ち上がる現在の墳丘周囲と比べれば緩やかな傾斜である。墳丘平面図でも西側に飛び出した部分がよく分かる。もっとも崩落の大きな部分から離れるにしたがって崩落した葺石が少なくなる様子が土層に現れており、試掘坑1では墳丘裾部から検出できているにもかかわらず礫の数は少ない。ちなみに試掘坑2でも同様に崩落した葺石は1区よりはるかに少ない。ちなみにこの大崩落直後の堆積物が第5層・第6層であり、崩落した葺石の上面から墨書土師器が検出されている。したがって、古代までは墳丘の葺石や周溝が残り、古墳としての形も明瞭であったものと想像できる。しかしながら、古代～中世にかけての条里制の施工とともに周溝は埋まり、大型古墳としての威儀も失われていったのであろうか。その後、江戸期になって、緩やかになった後円部西側斜面を墓地へ通ずる道として墳丘上への墓地造営が行われたと考えられる。

次に試掘坑1の土層図を見ると、墳丘基礎石から周溝へ向かって傾斜する様子がよく分かる。かろうじて1段残った葺石基礎石（試掘坑1南壁では2段残存、試掘坑2では2～3段）から緩やかに直線的に周溝内へ傾斜している。また、墳丘側には裏込めと思われる拳大の礫や砂礫混じり土層が基礎石裏に見られ、試掘坑2でも同様に確認されている。墳丘本体については基礎石西側に基盤と考えられる緻密な土層や流水による砂礫層の堆積が見られ、人為的に築造されたものではなく、自然の基盤土層を利用しているものである。このことは試掘坑2でも同様である。

第7層の崩落した葺石を大量に包含する土層には、人頭大前後の礫と拳大ほどのものが見られ、表面の葺石そのものと、裏込めに使用されていたものと想定される。また砂礫混じりの土層も随所にみられ、裏込めに充填されていた土と考えられる。



第3図 調査区土層図 (1/125) (配置図 1/1,000)

## 第3章 古墳の調査

### 第1節 平成20年度試掘調査（1頁、第2図）

試掘調査は道路拡張工事に伴う部分に、1m×4mの試掘坑を守山大塚古墳西側の畠に2ヶ所、丸塚古墳西側の畠に3ヶ所任意で設定し、北側より順次TP-1～5としている。

#### —TP-1—

古墳に最も近いTP-1は、第1～3層は表土及び旧耕作土である。第4層に鉄分を多く含む橙色の薄い層と、明灰色の厚い層が2回に渡り堆積しており、旧水田床土か旧畠地の耕作土と考えられる。この層からは青磁や白磁片、土師器が多数出土していることから中世以降の層であることが分かる。第5層は黒色で粘性を持ち非常に締まりがよい土層であった。この層から底面に「井」という文字が墨書された土師器の壊が出土している。

さらに10cmほど下がると試掘坑全面に人頭大の円

礫が検出され始め、これが古墳から崩落している葺石であると考えられた。試掘調査はこの葺石検出で終了している。



TP-1 葺石検出状況（南側より）



TP-2 完掘状況（南側より）

#### —TP-2—

TP-2は、底までの深さが1m90cmを測り、第9層まで検出できた。第1～4層まではTP-1と土層や出土遺物は同様である。第8層まで下がると墳丘に近い北側部分に、TP-1と同じような人頭大の円礫が検出できた。そのため、TP-2は周溝の底に崩落してきた葺石が落ち込んでいる状況である可能性が考えられた。第9層は基盤の層と考えられる風化した黄色の砂質層である。

#### —TP-3～TP-5—

丸塚古墳西側に設定したTP-3～5からは、丸塚古墳などに伴う遺構・遺物は確認できなかった。しかし、TP-4・5では攪乱層中に、庄内系や布留系の特徴を呈した土器片が多く含まれていた。その攪乱層は、黒色の非常にしっかりとした土と拳大の礫が混ざっており、おそらくこの黒色土は遺物包含層であったのだろう。丸塚古墳西側の畠は平成4年の圃場整備事業の際に重機で削られており、削られる以前には弥生時代終末から古墳時代初頭の古式土師器を使用する時期の包含層が残っていたことが推測される。

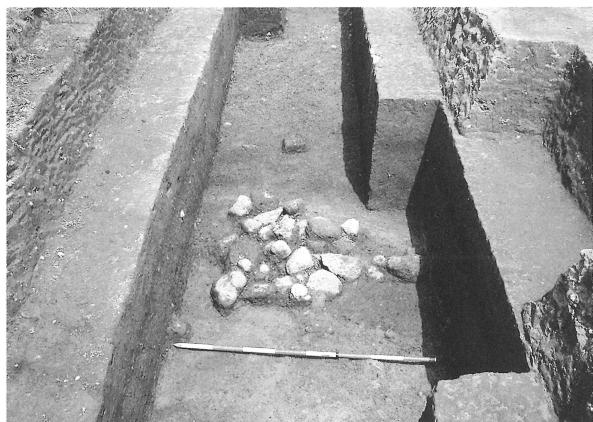
これらの結果により、TP-1では崩落した葺石が、TP-2では周溝の底部分が明瞭に残っていることが考えられることが分かった。守山大塚古墳とこの葺石・周溝が位置的にも矛盾していないことが確認されたことから、本格的に調査を行うこととなる。

## 第2節 平成21年度本調査

(1頁、第2図)

前述した平成20年度試掘調査の結果より、平成21年度に本調査を行うこととなった。1区・2区は道路拡幅予定地を対象に、試掘坑1は1区・2区の中央から守山大塚古墳に向かって斜めに入れたトレーニング、試掘坑2は試掘坑1からやや東に離れた部分に守山大塚古墳に向かって斜めに入れたトレーニングである。

1区：第5層からは試掘調査時にTP-1から出土した墨書土器の破片が見つかっている。その第5層を下していくと、同じく葺石と考えられる礫が区内全体に密集している状況が検出できた。明らかに並んでいる状況ではなく、礫と礫が重なりあるいは浮いている状態にあったため崩落している葺石であると判断し、除去作業を行った。除去作業を行うと、礫はおよそ3層くらいに重なっていた。何度かに渡って古墳本体から崩れ落ちていき、溜まった可能性が考えられる。葺石の除去作業を行う中で、葺石とは違う加工を行っているような角



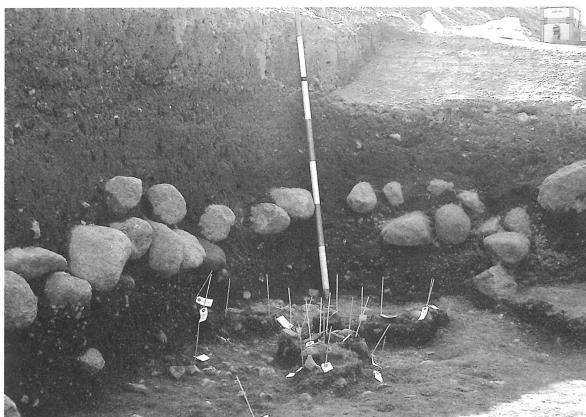
2区礫集中地点検出状況（南側より）



2区完掘状況（南側より）



1区葺石検出状況（北側より）



1区遺物検出状況（南側より）（15頁第7図1・2・3）

張った礫が少量検出されている。

1区の北側では、葺石を取り除いていく最中と取り除いてしまった際に、上写真に示しているように土器の破片が多数検出できた。いずれも壺の破片で、少なくとも3個体分あると思われる。葺石を除去した下から遺物が出土したため、葺石が崩落する前、もしくは崩落する最中に古墳から落ちたものであることが予想できる。しかし、全て完形ではなく破片資料のため詳細は判然としない。

2区：こちらも試掘調査時のTP-2と同じく、周溝の底部分と考えられる底面を検出することができた。2区内で最も深く周溝底と考えられる部分は、さらに窪んでおり、約20個の人頭大の礫を集めている状況が検出できた。2区内の他の場所では検出されておらず、この集石の目的は不明である。1区で検出されている葺石と同様の礫を使用しており、高壇の脚部のみが1点、礫の上に置かれている様な状態で出土している。その部分だけ人為的に葺石と同様の礫を集め放り込んでいることが推測される。1区の様に葺石が崩落してい



1区・試掘坑1葺石検出状況（南側より）



試掘坑1葺石検出状況（北側より）

**試掘坑2：**ここでは、試掘坑1で検出できた石列の東側延長線上に、同様に並ぶ葺石基底部である石列を検出することができた。礫の大きさも試掘坑1の基底部とほぼ同じで、人頭大より一回り大きい。さらに試掘坑2で検出できたその石列は、試掘坑1よりもさらにしっかりと石垣のように2段ないし3段と非常に綺麗に積まれていた。写真からも分かるように東側はやや崩落しかけており、石垣の礫と他に拳大の礫が露出している。この拳大の礫は、石垣の裏込めであると考えることができる。石列を上から見ても、裏込めの入っている部分は明らかに土色も違い、拳大の礫が見られるため、しっかりとした裏込めを行った上で葺石を積んでいることがわかる。基底の南側には試掘坑1で検出できたような崩落した葺石が検出され、他の調査区同様除去していくと、東側の石垣崩落部分の前より畿内系の二重口縁壺（15頁、第7図7）の口縁部片が出土した。

るような状況や、対岸の立ち上がりは確認できていない。

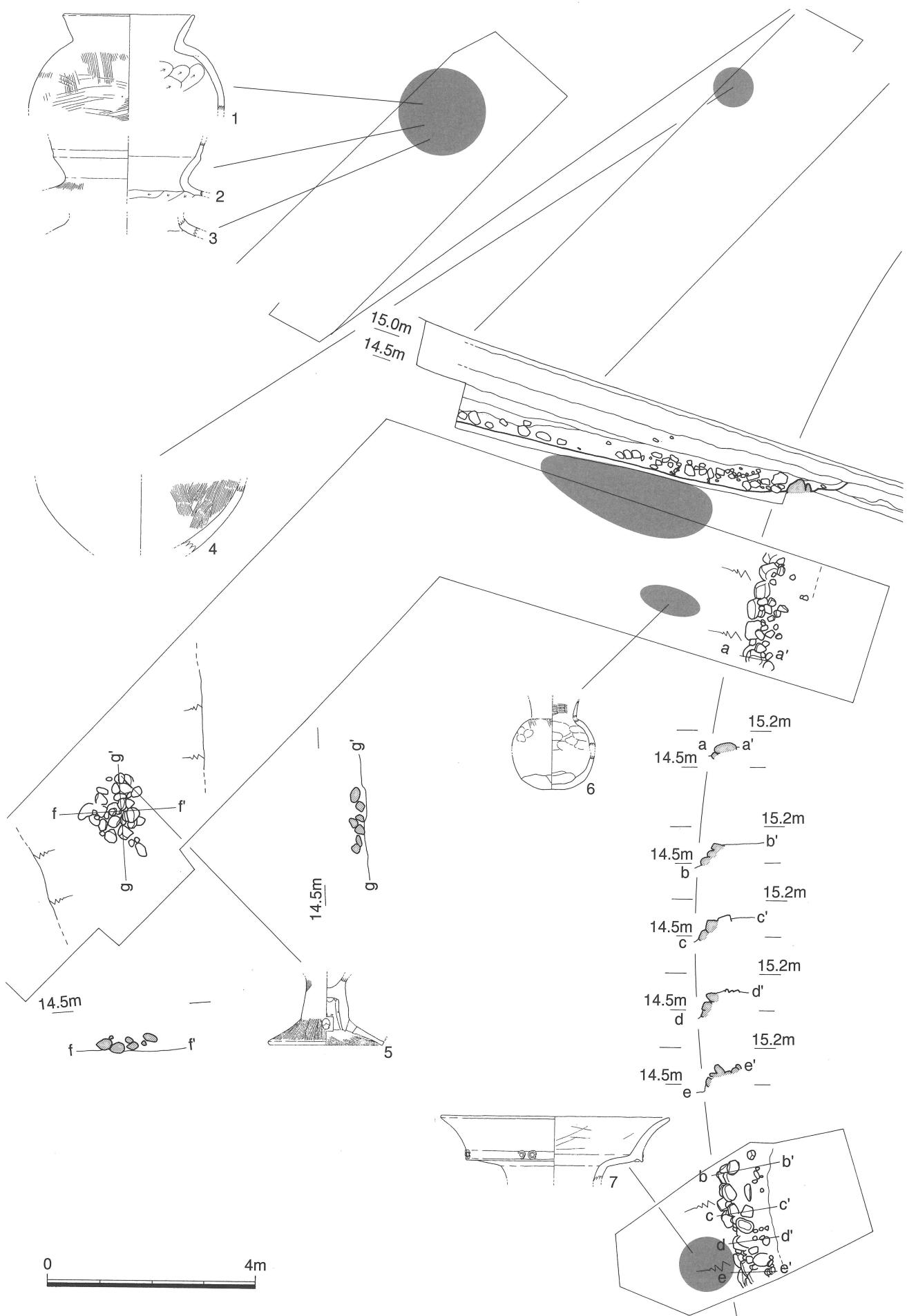
**試掘坑1：**1区と同様に崩落している葺石の状況を確認することができた。そのため同じく浮いている礫の除去を行うと、現在の後円部分にあたるコンクリート壁から、約2.5m外側に離れた部分に、古墳の基底となる礫が並んでいる状況が確認できた。崩落している礫と違い、人頭大より一回り大きく整然とした石列を呈している。石列の南側では2段に積まれている状況が確認できた。この2段に積まれている状況から、墳丘斜面が50度～60度に近い急斜面であることが考えられる。その石列から西側は、2区の周溝に向かって斜めに落ちていくように葺石が崩落している状況が確認できた。その崩落した葺石は他の区と同じく人頭大である。崩落した葺石の間より小型丸底土器の破片や、おそらく壺の胴部と考えられる破片が出土している。



試掘坑2葺石検出状況（南側より）



試掘坑2遺物（二重口縁壺）検出状況（西側より）



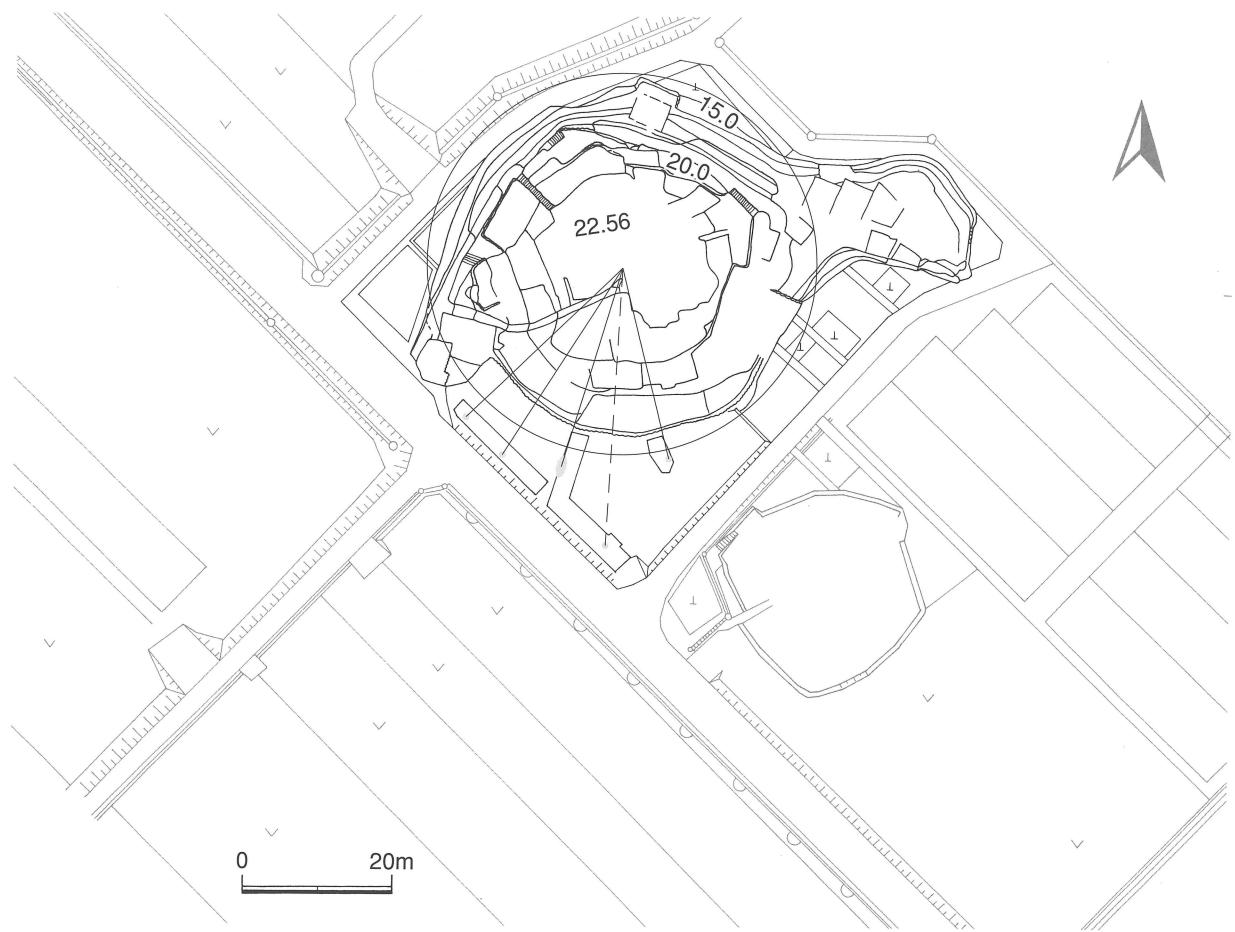
第4図 検出遺構配置図 (1/100)

### 第3節 検出遺構の配置（第4図・第5図）

前頁第4図に今回（平成21年度）の調査で検出された遺構の配置図を掲載している。前節では写真を掲載し説明を行っており、合わせて参照願いたい。主な遺構は試掘坑1及び試掘坑2の後円部墳丘基礎部分と、試掘坑1から2区にかけて検出された周溝及び周溝最深部の集石遺構である。出土遺物の詳細は第3章において説明するが、ここでは出土地点を表示している。第4図右側の弧状のラインは後円部基礎部分の想定ラインであり、基礎部分断面図については想定ラインに基底部分をそろえて表示している。また、基底部分の石積みについては、埋め戻しによって保存が可能であるため、裏込め部分については平面的な検出のみにとどめており、断面観察を行ったのは、試掘坑1の北側土層図部分のみである。いずれの断面図も表面から観察可能な部分だけを実測している。前節の写真では、試掘坑1及び試掘坑2の基底部分より周溝側に崩落した、葺石及び裏込めの石と考えられる礫群が見られるが、図には表現していない。試掘坑2は、試掘坑1において葺石基礎部分が検出されたことにより急遽トレーナーを設定したため、やや歪な形状となっている。しかしながら、試掘坑2の葺石基礎部分検出の際には、試掘坑1での成果と、現墳丘の形状から推測したとおりの場所で検出することができた。このことは後円部基礎部分の想定ラインが、かなりの精度で本来の墳丘形状を表現している、と考えられる。

葺石基礎部分平面図に見える小礫は裏込め内に入れ込まれた拳大の礫である。試掘坑2では葺石基礎に石列に沿うように裏込めの範囲が確認できており、実線（一部点線）で示している。試掘坑1の土層図からもわかるとおり、葺石の基礎1段目の石は基盤の土の上に直接乗っており、その裏側から斜めに裏込めの範囲が続く。試掘坑1ではa-a'部分以外1段目しか残存しておらず、1段目の基礎石が検出された時点では裏込めがほとんど残っていない状況であった。試掘坑2では最大3段の葺石が残存しており、裏込めの範囲も明確に判断できた。前述したが、裏込めは基盤の土に直接乗せた1段目の裏側から斜めに広がっており、試掘坑2での検出の際にも、葺石検出のための削平で若干掘りすぎている部分もある。したがって、試掘坑2の3段目の葺石の最上面が検出されたときには、裏込め範囲の実線がもう少し墳丘側に広がる。

第5図には、後円部墳丘基礎推定ラインと遺物の出土地点を示している。今回の調査ではそれほど多くの出土遺物を検出（葺石下位では）することはできなかったが、部分的に集中して検出されている。図版からも分かるとおり、15頁第7図1・2・3や7などの接合可能資料は、それぞれの地点でかなり近接して検出されている。また、図示できなかったが、試掘坑1の北側土層図の部分では壁面から3点の甕もしくは壺の胴部片が検出されているが、器壁の厚さ・胎土・色調などほぼ同一固体と考えられるものである。いずれの場所も調査区の縁であり、調査区外に残りの破片が残存していることが予想される。後円部墳丘基礎推定ラインの円の中心からそれぞれの出土地点を直線で結ぶと、ほぼ等間隔であることに気づく。点線で示したラインは2区の集石遺構であるが、この5箇所は墳丘の中心と考えられる位置から約15度の間隔で検出されている。後円部全体を24分割した格好となっている。葺石直下に検出された遺物は、葺石崩落の直前に周溝内へ落ち込んだものと想定されるため、墳丘の段築のテラス上に整然と壺・甕等が並べられていたことが推測できる。もちろん調査範囲も狭く、出土地点も墳丘基礎から近い・遠いなどの差もあり、断定的なことは言えないが、規則性を持った土器の配置や集石などの配置を行っていたことが考えられる。15頁第7図4の底部片は底を人為的に打ち欠いた可能性もあり、埴輪的なイメージも想像できる。



第5図 遺物出土地点の分布 (1/1,000)



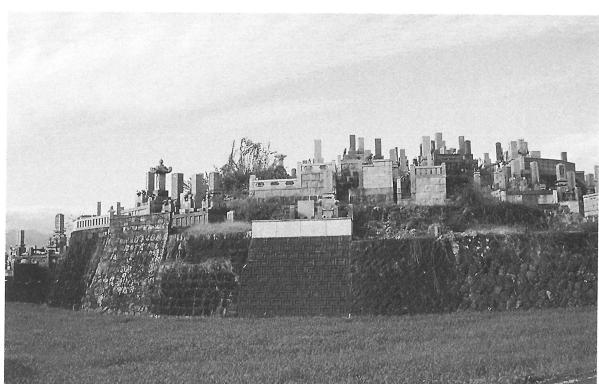
平成20年度 説明会風景



平成21年度 説明会風景①



平成21年度 説明会風景②



守山大塚古墳後円部と秋の空

## 第4節 墳丘形状

### —平面形状及び断面形状—

第6図に守山大塚古墳の墳丘平面図及び断面図を掲載している。墳丘周囲の畠地や水田、道路等については今回の調査時に測量・記録したものだが、墳丘上のコンターラインや個別の墓所の形状などは、平成2年の長崎県教委の測量図を当てはめたものである。したがって、断面図の形状と正確には符合しない。墳丘断面は4ヶ所を計測している。墳丘長軸断面、後円部最大径横断面、くびれ部分横断面、前方部端部横断面である。断面図の記録方法については、墳丘自体が墓地となっているため、困難な作業であった。断面部分が墓石本体や墓石を囲む周囲の石垣などに当たる部分が多く、そのような場合、1区画の墓地の基壇の端と端をつなぎだで計測している。本来の断面形状はかなり細かい凹凸があるはずであろうが、その部分は最初から計測していない。また、後円部最大径横断面と長軸断面の後円部側には、調査において検出された葺石基礎及び周溝最深部までのラインを入れ込んでいる。もちろん、後円部最大径断面南側（試掘坑2）以外の断面については調査できておらず、試掘坑1や試掘坑2の成果から想定されるラインとなる。

調査の成果から、後円部については、本来の大きさは現況より2m～3mほど広がることが予想され、復元される直径は51mとなる。断面図に示す調査成果から想定される、墳丘基礎部分や周溝の位置などから、後円部の本来の墳丘基礎部分については現況の畠地・道路下にそのほとんどが残存している可能性が高い。また、後円部最大径横断面をみると、北側の傾斜がかなり急角度となっているが、これは、現況の墓地を作る際、墳丘斜面外側に擁壁を作り、上部の墓地の面積を広げるように張り出しているためである。墳丘本来の斜面よりかなり外側に広がっていることを考えると、比較的スムーズに立ち上がる、後円部最大径横断面南側と同様の形状が想定される。墳丘長軸断面を見てみると、後円部に対して前方部が非常に低い様子が分かる。後円部との比高差は4.5mを測る。第2章基本土層の説明の際にも述べたが、守山大塚古墳は後円部西側が大きく崩落していることが想定される。断面図からもその緩やかな傾斜が見て取れる。前方部側は調査にいたっておらずなんとも判断ができないが、後円部と同様に地中に基底部が残存している可能性は高いであろう。また、前方部端部横断面北側は、法面がかなり崩落しており、南側とは形状が異なってしまっている。本来は前方部端部にむかってやや開く形状となるのであろうか。後円部と同様に2～3mほど前方部の基底部が広がるのであれば、墳丘の長さは最低でも70m以上と復元される。

墳丘全面を墓石が覆うため、墳丘の構造や段築の段数等不明な要素がおおく、本来の墳丘形態を明らかにすることは難しいが、断面形状や写真等を観察し若干の試案を行ってみたい。断面図に入れ込んでいる、調査において検出された葺石基礎のラインは、基底部から斜め上方へ2mの高さまで、検出された角度である60度で直線的に記入している。いずれの場所でも地上に飛び出た格好となっており、途中で削平されていることがわかる。ただし、試掘坑1・試掘坑2で検出された基底部の葺石は2～3段のみで、その角度がそのまま維持されているとは考えられないため、本来はいずれかの高さで傾斜が緩くなると考えられる。葺石基底部は概ね標高14.5m、後円部墳丘最上部は標高22.5mを測る。したがって、現存する後円部の高さは8mとなる。13頁の守山大塚古墳旧状写真（1983吾妻町教育委員会編「吾妻町史」）をみると、前方部上面から後円部にかけて通路が見られる。この通路は現在も残っており、後円部最大径横断面北側の17.5m～18mにかけて見られるやや傾斜した小さな平坦面である。前方部の高さとほぼ一致するもので、基底部からの比高差3m～3.5mとなる。このあたりが1段目の段築と2段目の段築の間のテラス部分と想定できる。段築の段数については調査結果からは一切不明であるが、もし3段であると仮定するならば、20m付近でも平坦面を確認することができる。以上のように憶測の域を出ないものではあるが、後円部については2～3段の段築、前方部については1段の段築の存在が推測可能であろう。



1983 吾妻町教育委員会編「吾妻町史」巻頭カラー写真より転用



第6図 墳丘断面図 (1/1,000)

## 第5節 遺物について

### —1区出土遺物—

1は壺である。出土した中でも最も破片が残存していた。口縁部が短い広口壺で、頸部の稜線が明確ではなく緩く口縁部に向かって立ち上がっている。器壁が非常に厚く、輪積み痕が明瞭に残る。内面調整はケズリ後にナデを行っており、外面は頸部から5cm程下部分から縦位のハケを行い、その後に中位部分に乱雑な横位のハケを行っている。

2は複合口縁壺の頸部から口縁部である。破片資料のため、推測しか出来ないが、かなり大きいものになると考えられる。1次口縁は短く外反し、2次口縁は途中までしか残っていないが、波打ちながら斜め上に延びるものである。内・外面ともに回転利用の横位のナデ、外面は頸部下から縦位のハケ、内面はくっきりと単位の分かるケズリの痕跡が残る。

3は壺の頸部片である。小破片だが、傾きは推測でき、おそらく1のような口縁部の短い広口壺の頸部、もしくは2のような複合口縁壺の頸部であることが考えられる。外面はナデ、内面はケズリを行っている。内・外面ともに頸部の接合部分が明瞭に残っている。胎土には赤色粒子を多く含んでおり、これと同様の破片は多数見られたが接合は出来なかった。

4はおそらく壺の底部片である。この破片は上の壺3点とはやや離れた場所から出土している。底面は残存しておらず、割れ具合から人為的に打ち欠いている可能性も考えられる。外面は非常に摩滅し剥落しているため、調整は分かりづらくなっている。内面は非常にしっかりとしたハケで、下から上に向かって斜位方向に行っている。

### —2区出土遺物—

5は高坏の脚部である。脚柱部は短く、中央でやや膨らみを持つエンタシス状を呈している。台裾部はあまり開いてはおらず、裾端部は丸くおさめる。脚柱部と台裾部の接続部分に3ヶ所の穿孔が見られる。外面は坏部との接続部分辺りに斜位のハケ、穿孔から下に縦位のハケを施している。脚注部の内面は横方向へのケズリ、台裾部には斜位のハケを施す。

### —試掘坑1出土遺物—

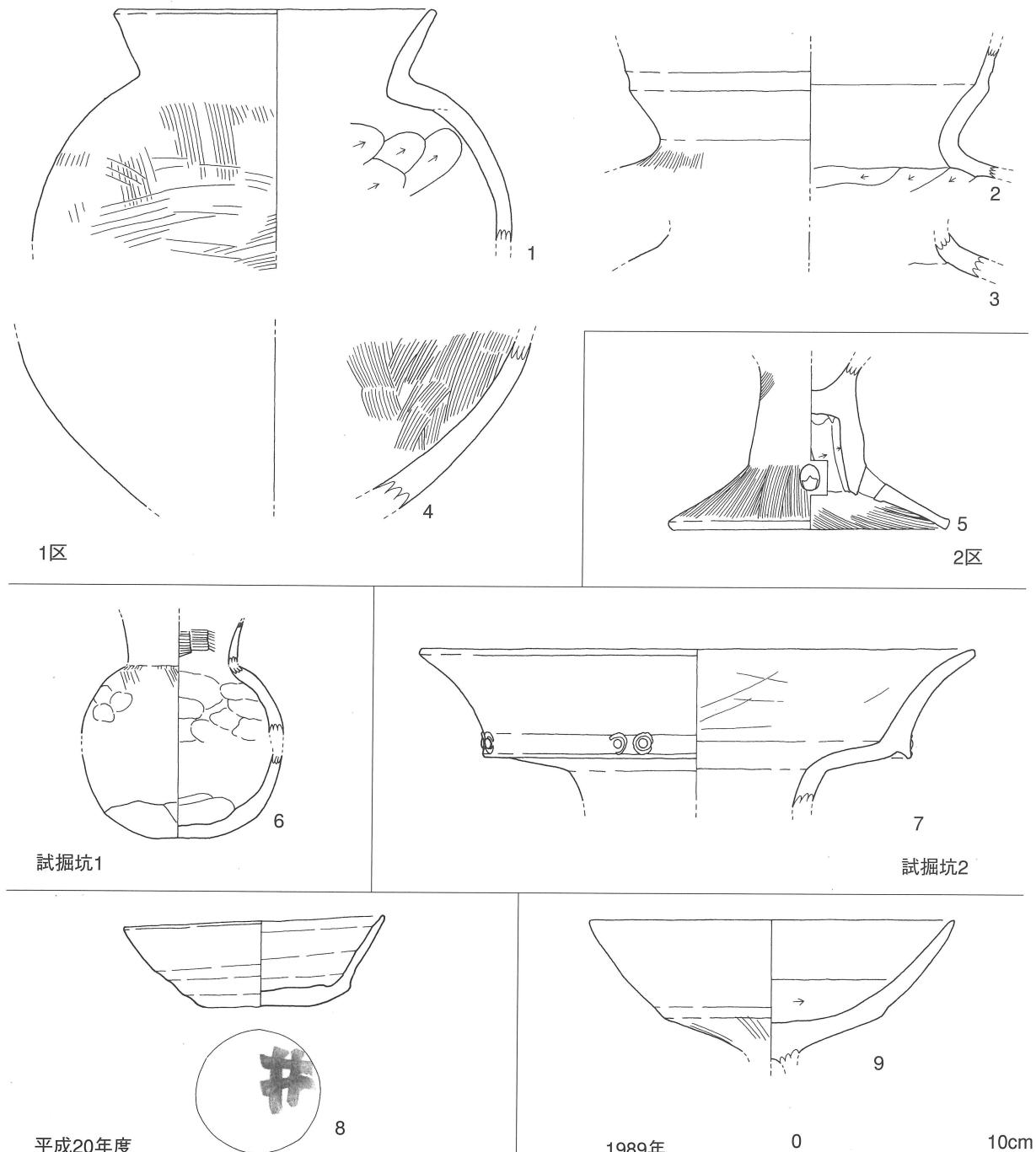
6は小型丸底土器の壺である。口縁部・肩部・胴部下位で破片がありそれぞれ接合はできなかったが、胎土等の特徴から同一個体は確実であるため、図面上で復元している。口縁部は短く直立しており、胴部は球形である。全体的に指でナデを行った痕が残っているため、手捏ねであることが分かる。口縁部は横位のナデで、内面は横位のハケ、頸部下には縦位のハケを行い、底部は内面に指頭圧痕が明瞭に残っている。外面はケズリ後にナデを行っている。

### —試掘坑2出土遺物—

7は畿内系の二重口縁壺である。頸部はほぼ直立しており、1次口縁は若干内湾しているが水平に伸び、2次口縁は外反する。外面は2次口縁が横位のハケ後に横位のナデ、端部分には二個を一対とした竹管文を施した円形浮文を貼り付けている。内面は2次口縁にやや斜位のハケが残っている。

### —平成20年度試掘調査時に出土した墨書土器—

8は底面に「井」の字が墨書された土師器の坏である。口縁は斜め上に真っ直ぐに伸びる。内・外面ともに回転を利用した横位のハケとナデを行っており、外面には積み上げた痕跡が残る。底面は糸切り後にヘラで整えた様に見られ、その上から墨書を行っている。吾妻町内では初めての発見で、長崎県内での報告も10例にも満たない。墨書土器の出土例は主として壱岐市及び雲仙市国見町周辺に集中している。国見町では石原遺跡で、土師器の底面に「宮」の字が墨書されたもの2点と、「万」の字が墨書されたもの1点が出土している。(辻田・竹中2003)「井」の字は、他県の遺跡などでも出土



第7図 出土遺物他 (1 / 3)

例はあるが、意味は分かっていないようである。墨書土器が出土したことはこの辺りに墨書土器を使うような施設があったことが推測される。

#### —1989年の表採遺物—

9は今回の調査で出土したものではなく、1989年に守山大塚古墳と丸塚古墳の間で表採された資料である。高坏の坏部で、外面には口縁部と坏部を接合した部分が明瞭に残るが、内面には見られない。脚柱部はおそらく細いものが付く。外面は回転利用の横位ナデ、坏部下半は、横位のナデ後に上から縦位のハケを施す。内面は口縁部接合部分から下を回転利用の横位のケズリを行っている。

## 第4章 まとめ

### 第1節 概要

#### 一島原半島の古墳調査についてー

今回は、平成20年度試掘調査及び平成21年度の本調査について報告を行った。第1章の調査歴でも述べたように、守山大塚古墳周辺は何度か測量調査や試掘調査が行われてはいたが、守山大塚古墳の内部主体や副葬品など時期を明確にできるものが見つかっていなかった。そのため研究があまり進められておらず、周知はされているもののいまいち判然としない前方後円墳であった。それが今回の調査により少しではあるが解明される部分がでてきた。

島原半島での古墳の調査は、島原市有明町に位置する一野遺跡があり、4世紀末～5世紀末の時期に含まれる8基の円墳が検出されている。主に箱式石棺で、土師器や須恵器、鉄鏃などが出土している。その他に調査が行われているもので、雲仙市内の国見町の高下古墳、瑞穂町の柿ノ本古墳、吾妻町の杉山古墳、愛野町の一本松古墳がある。いずれも墳丘は失われており、判然としない。横穴式石室が残っており、須恵器や鉄器、装身具類が調査によって検出され、時期は古墳時代後期であることが分かっている。

前方後円墳の調査は、2006年の雲仙市国見町倉地川古墳がある。時期的には6世紀後半～7世紀前半に属しており前方後円墳造営期でも新しい時期のものであることが分かっており、現段階で島原半島では最後に作られた古墳であると考えられている（竹中2006）。倉地川古墳では、鉄製品や須恵器などの遺物が多数出土している。今回の守山大塚古墳の調査で、島原半島ではこの倉地川古墳と合わせて2基目の前方後円墳の調査となった。

次節のまとめでは守山大塚古墳出土土器及び古墳自体についての若干の考察を行う。

### 第2節 まとめ

#### 一守山大塚古墳出土の古式土師器についてー

長崎県内での古式土師器研究は、古門雅高氏が有明海西岸の本県域について（古門1997）で、I期～V期までの分類が行われている。I期（庄内式並行期）、II期（布留式古相）、III期（布留式新相）である。今回はこの古門氏の編年に、さらに柳田康雄氏の北部九州編年（柳田1991）、蒲原宏行氏の佐賀平野中心の編年（蒲原1991）を参考に加えて守山大塚古墳出土土師器の位置付けを検討したい。出土した土器はいずれも破片資料のためしっかりと位置付けは難しく、若干大まかにはなるが時期を示したいと思う。

本調査における出土土器の主体は壺形土器である。明らかに葺石直下から出土したもので、形状が明確なものは1区の第7図1直口壺、第7図3複合口縁壺、試掘坑2の第7図6二重口縁壺である。

1区で出土した広口壺・複合口縁壺の2点は、おそらく復元したときの大きさが同様を呈する。器面が分厚く、輪積み痕が明瞭に残っていること、外面はハケ・内面はしっかりとケズリ調整を行っている特徴も類似する。複合口縁壺はあまり明確でない1次口縁と2次口縁の接合部分の稜や、斜めに外反し長く伸びてはいかない口縁部を持つことなどの特徴から、肥後系の影響を受けた在地系であることが考えられる。同じ地点から出土したその他の破片も、外面ハケ・内面ケズリと布留系の特徴を持つ。

試掘坑2で出土した二重口縁壺は口縁部のみの出土であるが、1次口縁が水平に伸び、2次口縁が斜めに上がっていき、口縁部に円形浮文が付く装飾が行われているタイプである。蒲原氏の二重口縁

壺の編年（蒲原1989）で同じ様な特徴を呈するものがタケ里に見られる。

試掘坑1で出土した小型丸底土器の壺（第7図6）は、葺石検出時のもので1区と試掘坑2の壺とは出土状況が違い、葺石が崩落する際に一緒に落ちてきたことが考えられる。1区の葺石直下から出土した壺形土器とほぼ同じ時期に属すると思われる。

以上のことより、北部九州や佐賀平野の編年を参考にし、守山大塚古墳の土師器は総じて古門氏編年のⅡ期（布留式古相）の特徴を有すると言える。Ⅱ期でも古い時期に当たる事も考えられ、概ね4世紀前半に含まれるだろう。

1区の葺石直下から出土した壺形土器（第7図1・2・3）は、器壁が厚いことや内面に粘土の輪積み痕が明瞭に残っている。小破片のため判断するのは難しいが、第7図4の底面は焼成後に外側から打ち欠いているように思われる。これらの特徴から、九州Ⅰ期の埴輪に当たる事も考えられるが、全て一部分の破片や口縁部のみなどの全体が分かるようなものではなかったため、今回は壺形土器で報告を行っている。

#### 一丸塚古墳について

第1章でも述べたように、昭和41年に島原史学会が丸塚古墳の上で試掘調査を行っており、その際に出土した遺物は1983年に出版された吾妻町史に、「あたかも鉄道のレールの止め具に使う犬釘状の鉄具が二個、これとほとんど同層位で弥生高坏の大型破片、古墳期の高坏土師破片が出土した」とある。

丸塚古墳は昔から、円墳や守山大塚古墳の陪塚などと言われてきたが、出土した遺物が弥生・古墳の高坏ということで定かではない。平成20年度の試掘調査で丸塚の西側にある畑を調査した際には、弥生終末期～古墳初頭期の古式土師器が出土しているため、丸塚古墳は守山大塚古墳よりは少し前段階である可能性が高いことも考えられる。そのため、もう一度、遺物も含めた上で検討を行った方がよいだろう。

#### 一守山大塚古墳の位置付けについて

守山大塚古墳については過去に、蒲原宏行氏が「初源的な墳形・（平成2年長崎県教委の）表採の二重口縁壺より4世紀でも古く位置付けられる」（蒲原1995）や「（初期の大型前方後円墳で中九州では）大型のものとしては島原半島北部の守山大塚古墳がその可能性を指摘できる位である。」（蒲原2003）とあり、今まで調査は行われていなかったが前期の大型古墳として注目されていた。

今回出土した遺物も、出土土器位置付けて述べたように、この表採された二重口縁壺とおおよそ同時期に当たるものと考えられる。今回の調査で出土した土器は、葺石直下より出土していることから、葺石が崩落する際もしくは崩落する前に古墳から落ちてきていることが言える。よってこれらの遺物は守山大塚古墳の築造年代により近いものであることが推測できる。

葺石に使われている礫は、全て円礫の角閃石安山岩であった。島原半島では、普賢岳の噴火により角閃石安山岩が産出されている。円礫であったため、調達場所は、守山大塚古墳東側を流れる田内川で、そこから運んできた河原石を葺石として利用した可能性が高い。周溝については、今回の調査では、対岸の立ち上がりは検出されなかったため、かなり広くなることが予想される。

長崎県内の大規模古墳としては、壱岐市芦辺町に位置する双六古墳、東彼杵郡東彼杵町に位置するひさご塚古墳がある。双六古墳は全長90mを呈し、前方部が非常に長い形状や出土遺物から6世紀の前方後円墳である。ひさご塚古墳は全長58.8mを呈しており、調査の結果5世紀の前方後円墳であることが考えられている。今回の発掘調査によって守山大塚古墳は、基底になる葺石の検出から現況より後円部分がさらに広がり、出土した土器や古墳自体の形状からこれまで言われていた通り4世紀で

も古い時期のものであることが分かった。そのため現段階では、長崎県内では最も古く最大級の前方後円墳であることが言える。

試掘の際には、小破片ではあるが、弥生時代終末期～古墳時代初頭期にかけての庄内系や布留系の特徴を呈す古式土師器が出土しているため、守山大塚古墳周辺にはこの時期の土器を使う集落が展開していたことが伺える。前方後円墳が築造され、そして試掘で出土した墨書き土器を使う古代、青磁や白磁を使う中世、古墳時代以降も以前も守山大塚古墳周辺には時代の流れがあることを想像することができる。

今回の調査では、大変多くの成果を得ることができたため、調査終了後に、報道機関や一般の方への現地説明会を行った。前年度の試掘調査時に行なった現地説明会よりも、吾妻町内から来た方の人数が増え、住んでいる町にこれほど立派な前方後円墳があるのだということを知ってもらえることができた。これもまた発掘調査と同じくらい大きな成果であったと思う。調査で色々な部分が分かったが、前方部や埋葬施設など守山大塚古墳にはまだまだ分かっていないことが多く残る。これからも機会があればまた調査を行い、今回報告し足りなかった部分と合わせて随時報告することができるようになりたい。

現地説明会に来てご教示をしていただいた柳沢先生を始めとする九州前方後円墳研究会の皆様、葺石が敷き詰まった部分や深い場所など足場の悪い中調査してもらった作業員さん方、並びに報告書作成に力を貸してくれたスタッフ一同には末筆ながら感謝の意を表します。

#### 【参考文献】

- 石野博信編 1995『全国古墳編年集成』雄山閣出版  
石野博信・岩崎卓也他編 1998『古墳時代の研究 7 古墳I 墳丘と内部構造』雄山閣出版  
石野博信・岩崎卓也他編 1998『古墳時代の研究 10 地域の古墳I 西日本』雄山閣出版  
蒲原宏行 1989「北部九州出土の畿内系二重口縁壺—その編年と系譜をめぐってー」『古文化談叢 第20集 発刊記念論集（中）』九州古文化研究会  
蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合ー」『佐賀県立博物館・美術館調査研究所 第16集』  
蒲原宏行 2003「弥生の墓制と古墳の出現」『季刊考古学 第84号 古墳前夜の西日本』（株）雄山閣  
蒲原宏行 2009「第3節 久里双水古墳出土古式土師器の位置付け」『久里双水古墳』唐津市埋蔵文化財調査報告第95集 唐津市教育委員会  
財団法人大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター  
正林護 1978『柿ノ本古墳 南高来郡瑞穂町所在の古墳の調査』瑞穂町文化財調査報告書 第1集 瑞穂町教育委員会  
高橋 徹 1998「埴輪の種類と編年 G九州」『古墳時代の研究 9 古墳III 境輪』雄山閣出版  
竹中哲朗・織田健吾 2006『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第1集 長崎県雲仙市教育委員会  
竹中哲朗・宇土靖之 2001『一野遺跡II』有明町文化財調査報告書 第14集 長崎県有明町教育委員会  
中島直幸編 1987『双水柴山遺跡』唐津市埋蔵文化財調査報告 第20集 唐津市教育委員会  
古門雅高 1999「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古 創刊号』西海考古同人会  
吉田雅隆 1978『杉山古墳調査報告書—消失した古墳の図上復元の研究ー』吾妻町の文化財3 吾妻町教育委員会  
吉田雅隆 1989『守山地区県営圃場整備事業に伴う旧地形 特に水流と古墳の立地条件という成立文化の源流研究に関する調査概報』吾妻町の文化財11 島原振興局 吾妻町教育委員会  
柳田康雄 1991「土師器の編年 九州」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣出版  
藤田和裕 1991『ひさご塚古墳』東彼杵町文化財調査報告書 第5集 長崎県東彼杵町教育委員会  
下田章吾 1994『ひさご塚古墳』東彼杵町文化財調査報告書 第6集 長崎県東彼杵町教育委員会  
宮崎康平 1967『まぼろしの邪馬台国』講談社

第1表 守山大塚古墳出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土／色調	備考
1	広口壺	口縁部径 残存高	14.6 10.9	外面 内面 胸部:縦位・横位のハケ 胸部:ケズリ	角閃石、雲母片、赤色粒子 外面:にぶい橙色(Hue7.5YR6/4) 内面:にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)	
2	複合後縁壺	口縁部径 (復元) 残存高	14 6.2	外面 内面 縦位のハケ ケズリ	赤色粒子、黒色粒子 にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	
3	壺(頸部)	頸部径 (復元) 残存高	14 2.1	外面 内面 ナデ ケズリ	角閃石、赤色粒子 にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	
4	壺(底部)	胴部径 (上から5cm部分で復元) 残存高	18 7.7	外面 内面 器面剥落のため不明 縦位のハケ	角閃石、白色粒子 にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)	
5	高壺(脚部)	底部径 残存高	12.8 7.8	外面 内面 脚柱部:斜位のハケ 台裾部:縦位のハケ 脚柱部:横位のケズリ	角閃石、赤色粒子、白色粒子 灰白色(Hue10YR8/2)	
6	小型丸底土器 (壺)	口縁部径 (復元) 底部径 残存高	5.6 2.7 10.3	外面 内面 頸部:斜位のハケ 底部:ケズリ後指頭圧痕 口縁部:横位のハケ	角閃石、赤色粒子 にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)	
7	二重口縁壺	口縁部径 (復元) 残存高	26 7.3	外面 内面 横位のハケ後に横位のナデ 斜位のハケ	角閃石、白色粒子 にぶい黄橙色(Hue5YR6/8)	
8	土師器	口縁部径 底部径 残存高	12.2 5.8 4.4	外面 内面 横位のハケ・ナデ 横位のハケ・ナデ	角閃石、白色粒子、雲母粒子 橙色(Hue5YR6/6)	底面に墨書き
9	高壺(环部)	口縁部径 残存高	17 6.2	外面 内面 全体的に横位のナデ 环部下半:縦位のハケ 环部下半:横位のケズリ 脚台部:横ナデ	角閃石、白色粒子、赤色粒子 にぶい黄橙色(Hue5YR6/4)	

